徳島新聞　平成30年10月7日（日）

kirariawa@topics.or.jp

乳がんと生きる

先頃、他界した女優の樹木希林さん、漫画家のさくらももこさんは乳がんだった。日本人女性の11人に1人が罹患するが、40歳未満は患者の5％程度にとどまる。孤独に陥りやすく、妊娠・出産などへの不安も募る。25歳で乳がんとなり、若年性乳がん患者の会をつくった竹條（ちくじょう）うてなさん（31）＝看護師、吉野川市＝に経験を聞いた。

25歳で罹患（りかん）。6年たった今…

2012年9月。夕飯を済ませた後、お風呂に入るとき、左胸の脇近くに硬くて丸いものがあるのに気付いた。当時25歳。両親、兄と暮らしながら、県内の病院で看護師として働いていた。乳がん患者の治療に携わることも多く、まず「乳がん」が頭に浮かんだ。

乳腺外科医の診察を受けると「良性の可能性は低い」と告げられた。血縁者に乳がん患者はいなかった。職場でも20代の患者は見たことがない。罹患は思ってもみなかった。「人生が変わってしまう」。不安だった。

数々の検査を経て、乳がんの診断が付いた。医師は説明した。「術後の抗がん剤治療の副作用で、妊娠ができなくなる可能性がある」。

がんの種類や病状などにもよるが、妊娠できる可能性を残すため、がんの治療前に受精卵や未受精卵子、卵巣組織を凍結する生殖医療を利用できる場合がある。ただ、費用は高額で、確実に妊娠・出産できるわけでもない。「当時は看護師2年目で、給与も多くない。すぐに治療しないと怖いとも思った」。医師から「希望するなら大学病院を紹介する」と言われたが見送り、治療を優先した。

職場を長期で休む手続きを取り、乳房切除の手術を受けた。術後2週間で抗がん剤治療が始まった。副作用の出方には個人差があるし、薬の種類にもよるが、竹條さんの場合は苦しんだ。悪心（おしん）。髪は洗うたびに排水溝が詰まるほど抜けた。目が開かないほど顔がむくみ、足の爪はもげた。

この間、一人で病と向き合った。「周囲にがんを知られるのも、慰められるのも嫌でした」。友だちから「結婚式に来て」「遊ぼう」と連絡が来ても返事はしなかった。「なぜ私だけ」との思いが胸に渦巻いた。

13年8月、治療をしながら職場復帰。16年5月に若年性乳がんコミュニティー「Sister」を立ち上げ、10月に初のイベントである講演会を開いた。ここで初めて同世代の患者と出会った。「ああ、徳島にもいたんだな、と思いました」。不定期ではあるが「おしゃべり会」を開き、同年代の仲間と集まる。話題は恋愛やセクシュアリティー、子育てなどにも及ぶ。独身メンバーとは一緒に婚活パーティーにも出掛ける。

14年1月で術後治療が全て終わった後は、半年に1度検査を受けている。昨年から取材を実名で受けたり、イベントで登壇したりするようになった。

以前は「どうせ理解されない」と心を閉ざしていたけれど、話せば分かってくれる人もいる。「伝えていきたい」と思うようになった。元気な自分を見てもらい、がんに対する偏見をなくしたい。がん患者の生殖医療への助成金など制度整備も働き掛けたい。

妊娠はできるかもしれないし、できないかもしれない。でも「結婚して子どもを産む」以外にも、生き方の選択肢はあると思えるようになった。一方で、卵子の凍結保存を考えてみたいとも思う。遺伝子検査は「結果を受け止める自信がないから」、受けていない。

「がんに勝つ」なんて表現があるけど、勝負じゃない。がんと生きる。私はそんな感覚でいます」。10月3日で手術から6年。この日を迎えるたび、また1年生きられたと思う。

文：木下 真存美　写真：山田 旬
紙面デザイン：村田 勝彦

妊娠の前に検診を

妊娠、出産をする世代の乳がんについて、丹黒章・徳島大医学部長は「検診で早期発見につなげることが大切」と強調する。

欧米では60、70代での罹患が多い乳がんだが、「日本では40代と60代に罹患のピークがあり、罹患率のグラフはM字型。そもそも若い世代でもかかるがんなのです」。

その中で一般に「若年性乳がん」と呼ばれるのは40歳未満の罹患。患者の5～10％とされる遺伝が関与する家族性乳がんは、若年で発症しやすい。自治体の乳がん検診は40歳以上が対象だが、血縁者に乳がん患者がいる場合は「20代から医師に相談して検診メニューを組んでもらい、自己負担で検診を受けてください」。自己触診も大切。

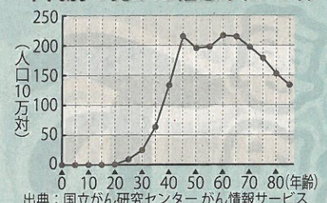
BRCA1、BRCA2という遺伝子の変異があれば高確率で乳がんになることが判明している。この変異は遺伝子検査で分かる。

妊娠授乳期に乳がんが見つかるケースもある。妊娠・出産の3千件に1例といわれ、まれではない。妊娠中の治療はさまざまな制約を伴う。「出産を希望するなら、妊娠前にまず検診を」。

乳がんと診断されたら、「出産希望などのライフプランを医師に相談して、病状に適した治療法を探ってほしい」。受精卵、未受精卵などの凍結保存が可能な徳島大学病院など、生殖医療を担う産婦人科と連携できる病院を選ぶのもポイントだ。

たんごく・あきら　1955年山口県生まれ。徳島大学医学部（胸部・内分泌・腫瘍外科学）教授。2017年から医学部長。

年代別の乳がん罹患率(2014年)



出典：国立がん研究センター がん情報サービス

編集後記

「若年性乳がんコミュニティーSister」の設立が徳島新聞紙面で紹介されたのは2016年10月23日。竹條うてなさんは仮名で登場し、手元だけの写真が載っている。

今回の取材依頼には「今は名前も顔も出していただいて結構です」と応え、これまでの揺れる気持ちを率直に語ってくれた。

がんを周囲に知られたくない人は多い。以前、匿名を条件に取材をさせてもらった患者もいる。公表すると、うわさ話の的とされ偏見にさらされると恐れていた。患者会に匿名で参加する人もいる。

がん患者は治療の大変さに加え、さまざまな生きづらさを抱える。その一端は、私たちの病気に対する無知が、生み出している。（木下）

Sisterへの問い合わせは〈akebono_sister_0501@yahoo.co.jp〉。ホームページへはウェブを「Sister」「乳がん」で検索。